エゾマツ

No. 43　　1998．1．10

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目　　次

1．巻頭言　新年を飛躍の年にしよう …… 会長　大友　健 …… (1)

2．寅・虎・とら・トラ …… (2)

3．副会長 川端功治さんに感謝 …… 近久喜枝　佐々木幸夫 …… (3)

4．野幌秋の陣～突然の初陣で貴重な体験 …… 矢島　慶子 …… (6)

5．会員の声 …… 目黒　　孝 …… (8)

6．キーワード …… (9)

7．また「ひとつの出会い」が喜びを感じさせてくれた …… 小泉　三雄 …… (11)

8．宮城の沢の自然 …… 武田　洋子 …… (13)

9．反魂草（ハンゴンソウ） …… 川端　功治 …… (17)

10．本の紹介 …… (21)

11．観察会研修会情報 …… (22)

12．編集後記 …… (24)

「巻 頭 言」

新年を飛躍の一年としよう

会 長　大 友　健

会員の皆様には、輝かしい希望に満ちあふれた、１９９８年を迎えられ共々お喜び申し上げます。

私達は、昨年いろいろ精力的に行事計画を実践し、満足のうちにも反省を加え、新年を迎えた今、更なる飛躍の年でありたいと願うのである。

全てを雪の白で覆う森の今を過ごし、大地の鼓動が聞こえるような胎動の春が訪れ、季節は最高のエネルギーとなる、燃える陽の夏の日差しと移り、そして鮮やかな紅葉の色で森を染め、実りの秋を迎える四季の彩りに、常に感動を覚え、魅せられながら、自然からの多くのメッセージを読み、聞き取り、人々に伝言として理解をしていただく喜び、それはレンジャー活動の使命感に燃える喜びではないでしょうか。

会報「４２」号に「森林生態系と共に生きるために」と題し、当会会員より身近なフイルドの現状を通して、自然に対する「倫理的平等の概念」と言う視点から、更に具体的に述べられ、私達にそれなりの教えをくれていることに対し、心から賛意を表したい。

旧年末に、環境庁の生物多様性保全検討委員会は、生態系ぐるみ自然保護と言う大項目を掲げ、生態系に着目して保護することは、個々の動植物の種の保護から、生息、生育地即ち面重視への、抜本的見直しにつなげたい旨を構想として、新聞報道があり自然保護行政に期待を大きくもつところである。

私達は、自然の生態系に対する、自らの立場を認識し、謙虚な態度で自然をとりこむことが大切と思う。「木を見て森を見ず」のこの言葉を常に心にし、森を愛する人々の輪を広げようではありませんか。

そして、その輪が更に新たな輪に展開することを期待して～～。

寅・虎・とら・トラ

今年の干支は「寅」です。会員の皆様の中には、年男・年女の方もいられることでしょう。

トラの学名は *Panthera tigria* ネコ科中最大の猛獣です。かって、その生息地として、アムール、ウスリー、朝鮮、中国、インド、ペルシャにかけての全域および、スマトラ、ジャワ、バリ島に分布していました。今世紀初頭には10万頭もいたそうです。それが、現在では5000頭、最大に見積もっても7500頭しか生息していないと推定されています。その原因は生息地の自然破壊が進んだり毛皮や漢方薬のための密猟がおこなわれたためです。そして、８亜種のうち、バリトラ、カスピトラ、ジャワトラの３亜種が絶滅したと見られています。

トラにまつわる諺は御存じの通りたくさんあります。「寅になる」「寅の威を借る狐」「張り子の寅」などの諺はあまりいただけません。せめて、「寅は千里往って千里還る」という勢いの盛んなさまをボランティア・レンジャーの活動に重ね合わせていきたいものです。

１０月以降の活動

１０月１９日（日）	・森林公園事務所主催「秋の森の観察会」協力参加 大沢口（下見　１０月１２日）
１０月２６日（日）	・「宮城の沢の自然」観察会 （下見　１１月１２日）
１１月１６日（日）	・「野幌の自然」観察会　開拓記念館前集合 （下見　１１月９日）
１２月　４日（木）	・森林公園事務所主催「１２月の森の観察会」協力参加 （下見　１１月２７日）
１月　８日（木）	・森林公園事務所主催「１月の森の観察会」協力参加
１月１０日（日）	・広報誌「エゾマツ」４３号　発行

副会長 川端功治さんに感謝

札幌市　　近久　喜枝
佐々木　幸夫

１９９７年を振り返り、自然観察会での自分の足跡を見ると、一際、川端さんとの繋りが印象強く残っています。

川端さんは、ご承知のように我が協議会の副会長として８０歳の年齢と思われない若々しさで、わたくしたちの先頭に立って行動されている姿に、常々感謝と敬意の念で接していますが、そもそも川端さんのお名前は、わたくしが自然観察の案内をする際の、参考の書としています朝日新聞社発行の「北方植物園」昭和４８年７月第６版のスギの項で、当時函館営林局の利用課長をされていた川端さんが、スギの「経済林としては、函館から西部かけてではないか」といっている。と、記述されているの見ていますので、勿論、川端さんはご承知でないことですが、この本の奥書で昭和４８年以降から知っていたことになります。

わたくしが、この北海道ボランティア・レンジャー協議会に加入した大きな理由の一つは、自然を介して人を知り、そのなかから、自分自身の勉強をするとともに、あわせて幾らかでもその行動が、社会に役立てばとの思いであります。今日まで多くの会員の仲間に助けられて来たことに、感謝の念を禁じ得ないのでありますが、とくに、近年の川端さんのご努力に、多謝の思いで一杯であります。

川端さんの現役時代は北海道営林局勤務で、初代会長の故河村千束さんの先輩に当たり、森林に対してはその仕事を通じて得られたもの以外に、単品に詳しく、かつ、総合的な視野でものごとを見られ、的確な判断のもとにお話されることは、まことに非凡な行為と見てとり、常々その言動に学ぶことが多いのでありますし、そのうえ洒脱な話術は、まさに垂涎の的で、さすがに今まで生きてきたことが、集大成され、燻し銀の感がする思いをいだくのはわたくし一人だけではないでしょう。わたくしたち会員に対し、如何にそのレベルアップを希うかが、昨年から本年にかけての精力的な行動や、植物や動物について同定が可能なように、実物大のしかもカラーコピーを主体にした資料（いわゆる川端図鑑なるもの）を提供く

ださいました。これらの写真撮影からコピーまでの労力、時間、経費などなど、他人に思われないご苦労がおありであったことは想像に難くはありませんし、奥様のご協力があってこそとも思います。

いままでの資料を整理してみますと、野幌森林公園の冬芽編、野幌森林公園の植物編、初冬の木の芽編、野幌森林公園のアニマルトラキング編に分かれ、自然観察会で話題になったり、会員同士の会話のなかから最低こだけは知っていた方がよいと思われる木本、草本、動物について、実に手際よく整理しています。

これらの莫大なご苦労に、わたくしたちも何か、等しく感謝の意を込めたお返しをしたらよいか一部の仲間とも話しましたが、川端さんの意向としては、わたくしたち自然観察会の案内に出ている会員に、その労を犒うことでやっているとのことで、現在の時点での判断では、わたくしたち会員が案内する自然観察会に十分に反映させ、そしてより充実した解説をすることが、さしあたり川端さんに喜んでいただけることではないだろうかと思っています。

因に、この資料の中味に寸分触れますと、カエデ科１１種、ハンノキ科７種、ニガキ科２種、ニレ科７種、ブナ科３種、クルミ科２種、カツラ科１種、ニシキギ科４種、バラ科５種、ウコギ科３種、ウルシ科３種、シナノキ科３種、ユキノシタ科４種、ヤナギ科１５種、ミズキ科１種、クマツヅラ科１種、ハイノキ科１種、モクセイ科２種、エゴノキ科１種、クワ科１種、モクレン科２種、トチノキ科１種、ブドウ科１種、マタタビ科１種、モチノキ科１種、スミレ科３種、ラン科７種、キク科１４種、アカバナ科４種、キキョウ科２種、シソ科４種、ツリフネソウ科１種、イチヤクソウ科３種、フウロソウ科１種、イラクサ科１種、イネ科３種、シダ植物２７種、チョウの仲間４種、マイマイの仲間５種、哺乳動物の仲間１２種と、多数に及んでいます。

これらの資料を手元に置き、常々確認するとレベルアップに繋がることは必定であり、さらにこれらを教本に、もっと深く学ぶことも大事なことであります。したがって、今後は会員の勉強会テキストとして、「野幌森林公園自然観察ガイドブック」とともにその活用を図りたいものと思っている昨今です。

また、会員の皆様のうちで、この資料を必要とする方がおりましたら、白黒のコピーになりますが、川端さんのお許しを得て、配付したいものです。

最後になりましたが、川端さんの今後ますますのご健康とご発展をお祈りしま

すとともに、わたくしたちをよろしくお教導くださるようせつにお願い致し、筆を擱きます。

（１９９７．１２．２０記　　文責　佐々木　幸　夫）

付　記

北海道ボランティア・レンジャー協議会では、１９９７年度主催の自然観察会は９回、野幌森林公園事務所８回の計１７回に、各１回の下見で年度内に最低３４回は参加出来出来ます。それに加えて会員の希望がありますと、同じ１９９７年の例では、機関、団体の案内が延べ８回にその下見が最低８回と、実に５０回に及びます。その他に調査の協力が、延べ５回で野外での勉強する機会が５５回にもなります。

とくに、下見は仲間同士で話し合いが出来るのですから、その気になりますと結構、勉強になります。気軽に参加してください。

お知らせ

協議会設立１０周年記念として会員各位のご協力を頂きました、『野幌森林公園自然観察ガイドブック』につきまして、現在、若干余冊が事務局に保管されています。

ご覧のように、単に野幌森林公園にとどまらず、自然解説員として自然観察会えの基本的事項も掲載されています。広く知人・友人にご紹介ください。

１冊５００円で頒布しますので、事務局にご連絡ください。

野幌秋の陣　～突然の初陣で貴重な体験～

札幌市　　矢　島　　慶　子

「はい、今日は矢島さん、このグループを持ってね。」　１１月の晴れた朝、一般参加者の方々の前で突然新参者の私を切り離した佐々木先生。こちらは何の心構えも無く、おまけに今日は遅刻で双眼鏡も忘れています。刀も弓もなき初陣、３０分なら大丈夫だが果たして２時間もちこたえるでしょうか。ドキドキ……。

動揺を隠してグループの顔ぶれをみますと何とあちこちの観察会でのベテランぞろい、博識なメンバーではありませんか。とっさに先生の意図が呑みこめて、自分は脇役になろうと思いました。７割を参加者の話し合いで、自分は３割をやれば良いような気がしたからです。きっと何とかなるでしょう。スタート。

最初のウスタビガの説明は、タイミングよく、いただいた先輩のカラーコピーに全部頼ります。今まで蛾は好きでなかったのですが、成虫の命がはかないことを知って同情。

少し前進して、赤いツルウメモドキの観賞は生け花をする方にお任せし、私の方は何を話したらよいかと頭をひねります。足元の枯葉の朽ちたのとミミズやダニの関係――これではきっと嫌われる？今日のテキストは遅刻して今読むようでは遅かりし、使いこなせぬと思われます。秋も深まるとシダ類ばかりが目立つけれど、あまり詳しく質問されないことを祈りましょう。

林床の植物を皆さん、やたらと可愛がるが、ツルシキミ、ユズリハ、ナニワズもどの部分が有毒でしたっけ……。でもさすがはベテランの皆さん、すごい観察力。

先週レンジャーが誰も見つけなかったフッキソウの実を、すでに発見して味わっています。自由に捕ってよいとは言ってないけれど、私よりテンポが早いので追いつきません。

もうお互いに教え合い、学び合い、木の枝にはさんであるドングリも「カケスの貯食だ。」と見逃しません。貯金を他人に盗られた場合、人間ほど執着する者はい

ないようです。哲学的なお話になりました。ベテラン方は笑ったり、メモをとったりしながらゆったりと進みます。いったん打ち解けてしまうと、オープンな気持ちでのってくださり、私が「キハダの実は棚の向こうに落ちています。残念ですね」済ませても、皆様棚からのり出して、開拓の村の通行人に拾ってもらったりして、しっかり味わいます。冬に備えて参加者もビタミンやミネラルを貯えるのでしょうか。積極的な方々で、すでに人生観も自然から多く学んでおられました。分類で意見が分かれた時は私も一票を投票しましたが、対等の立場で楽しかった2時間でした。

終わって一言ずつご意見を賜りましたら、皆が親しく話した、家族的であったとのこと、ベテランの先生の方がよかったなんて、そんなあからさまなこと誰もおっしゃいませんよ。皆様は優しいですもの。やれやれ、ほっと。

私自身の感想としては、やはり自分はまだまだです。川端先生からあれほど良い資料をいただいておきながら、木々の芽の話も全くできませんでした。そして、こちらの苦手なことを質問されたときは前後のグループのレンジャーの方に助けていただきました。どうも有難うございました。

反省会となって、私のドキドキしたという訴えに先輩方は同情してくださいました。「佐々木さん、予告もなく新人を一人にするなんて、そんなのスパルタだよ、冷たい男だね。」これは皆様の思いやり。「だって、かわいい子には旅させろって言うだろう。」この答えは佐々木道場の思いやりです。どちらも嬉し小春日和の日曜日でした。

以前に私が一般参加したとき、周囲の方々はいろいろな動機で参加されていましたが、人間どうしの自然なふれ合いも観察会に求められているということが印象的でした。先生の説明をよく見、よく聞くために人を追い越して、一番前を占めるのも本意ではないし、皆が友人として接することで、観察会のあとの盗掘も防げるのではないか、とのことでした。今日のグループの「家族的だった。」との言葉と重なってきます。わずか2時間、一期一会かもしれません。でも自然の中で命の洗濯をしながらのお付き合いは尊い、自分よりも人生の先輩が多いから、なおさら尊く

思います。昔、山小屋に一晩集うて自然の魅力を語り、翌朝には各々の道に別れていったあの若者たちが、年輪を重ねてまた戻ってきたような……。

何かほのぼのと懐かしいものを感じた今日の観察会、すばらしいグループを担当させていただいたことを感謝しています。

（たいせつなこと。いくらベテランの方々でもいつも私とではかわいそうです。次回は大先生について詳しくみっちりと勉強なさると良いでしょう。）

会員の声

寸　言

札幌市北区　　目　黒　　孝

◎地球誕生から４６億年、地球上で生物の産声をあげたのが３６億年前、記年すべき生命が誕生し、その後人類の出現、海は生命、人類の誕生・育成の大恩がある。その海に人類は今仇で返す暴挙に出て、有害物の不法投棄、汚染物を流失し、まことに憂うべき時代だ。

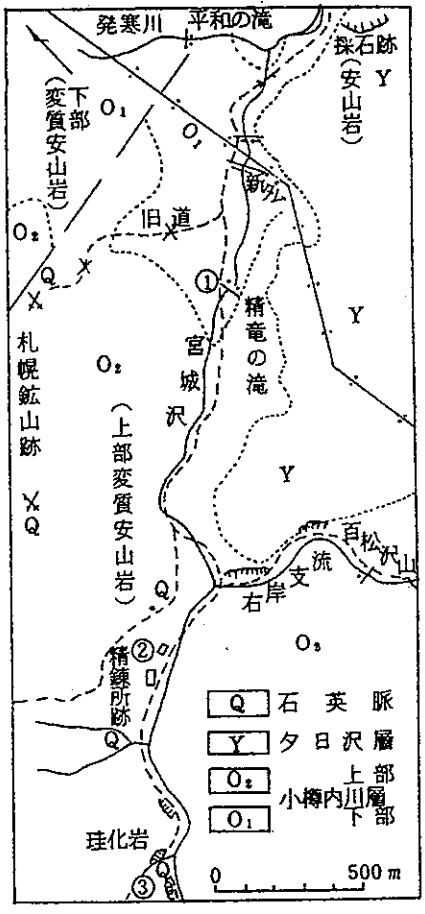
◎伝統と市民に愛されるボラレン会に、シンボルのバッヂ、会旗の設置を望みたい。

◎自然体験教室、野生教室を企画し、街の中での自然ボランティアを望みたい。

《宮城の沢の地形・地質》

昨年10月26日（日）宮城の沢で観察会を行いました。ここを会場とする観察会は本会では初めての試みでした。初冬の一日、筆者の武田さんをはじめ会員と多くの参加者によって、有意義な観察会となりました。ここで、宮城の沢の地形・地質について簡単にふれておきます。

宮城沢附近



宮城の沢は、百松沢山（1038m）北側斜面に源を発します。市営バス「平和の滝入り口」バス停から採石場跡と平和霊園との間を通り抜け、平和湖（平和ダム）の貯水池を右に見ながら宮城の沢に入ります。

宮城の沢下流の橋を渡ってから、左岸林道を約800m行くと、精竜の滝への降り口があります。

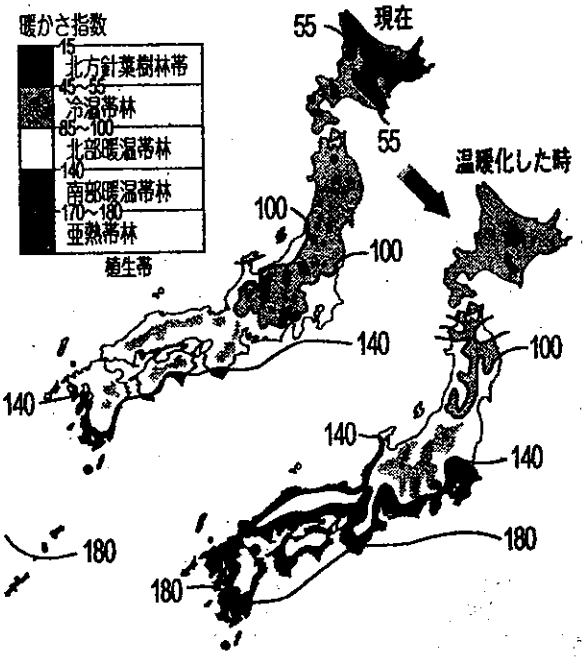
精竜の滝の高さは約７ｍで、小樽内川層の硬い暗青色変質安山岩の壁を流れ落ちています。滝の下の岩場には、緑～赤色を帯びた自破砕溶岩状の部分も見られます。滝の規模、岩質などの多くの点で精竜の滝と平和の滝とはよく似ています。

精竜の滝の上流、約1.5kmの宮城の沢中流左岸に旧札幌鉱山の精練所跡がありますが、今では崩れかかった階段状の石垣が残っているだけです。

札幌鉱山は明治の末期から金・銀鉱山として探鉱・採鉱が行われていましたが、昭和11～12年ころ操業を中止しました。戦後26～27年ころ再開されましたが、下部で細脈となり間もなく閉山しました。この鉱床は、含金・銀石英脈で、ほかに脈石として少量の方解石・重晶石をともなう場合もあります。また、石英脈中には、まれに水晶の小結晶も見られます。宮城の沢上流部分には、美しい青緑色の変質安山岩の岩場がナメ状に連なり、秋の紅葉がみごとです。

いて復習してみましょう。地球の温度は、太陽から流れ込む日射エネルギーと、地球自体が宇宙に向けて出す熱放射とのバランスによって定まります。太陽から流入する日射は大気を素通りして地表面で吸収されます。日射を吸収して加熱された地表面から赤外線が熱放射されますが、大気中には赤外線放射を吸収する、前述の温室効果ガスがあり、地表面からの熱を吸収してしまいます。吸収された熱の一部は下向きに放射されるため、地表面はより高い温度となります。この効果を「温室効果」といいます。

温暖化が進んだ日本列島の植生分布予想図



地球温暖化とは、生産活動の拡大に伴う温室効果ガスの排出量の増大により温室効果ガスの濃度が高まり、温室効果が強められ、地表面の温度が気候の自然な変動に加えて上昇することです。その結果、海水の膨脹や極氷の融解に伴う海面上昇や気候メカニズムの変化に伴う異常気候の頻発等が発生してきて、人類にとって非常に大きな影響を及ぼしてきます。１９世紀の産業革命以前、地球上の二酸化炭素は２８０ppm程度であったものが、1986年には345ppm程度まで進んでいると言われています。そして、2030年代には、産業革命以前の二酸化炭素の濃度がもたらす温室効果の２倍に達すると言われています。

1995年、世界の学者でつくる「気候変動に関する政府間パネル」（ＩＰＣＣ）は、地球の平均気温は19世紀末以降0.3~0.6度上昇し、海面も氷河の融解などで10~25cm上昇したと推測しています。さらに、2100年の地球の平均気温は現在より２度上昇し、海面は50cm上昇すると予測しています。地球温暖化をもたらす、温室効果ガスの排出には、私たちの生活や生産活動が大きく関与しています。それは、とりもなおさず私たち一人ひとりの問題でもあるわけです。　（ 文中の図は 1997.11.25 北海道新聞 引用 ）

また『ひとつの出会い』が　喜びを感じさせてくれた

――立命館大学慶祥高等学校「森林公園探索」10月4日18日――

札幌市　　小泉　三雄

佐々木事務局長から生徒の野幌森林公園を案内してほしと依頼された時「高校生なら真剣に話を聞いてくれないだろう……」と、先入観が私の脳裏にひらめき積極性に欠けた「いいですよ、手伝います」の返事をいた。

１０月４日（土）１８日（土）との事、紅葉も里に降りながら秋の深まりを増す時だが、“もう少し早い時期に計画すれば良かったのに”学校側の実情もわからずに、ひとりつぶやいた。

今年春、野幌森林公園南側、北広島市に隣接し場所に開校したことだけは聞いていたので、観察会の後に校舎周辺をぐるっと回って見た。

我々のメーンフィールド内にあると言ってもいい場所、西野幌の一角の広大なキャンバスであった。周辺の豊かな自然環境との調和を重視して“自然にやさしい”施設であり、見てびっくり、見る前には考えられなかった行動力が心を沸き立てた。【百聞は一見に如かず】消極的であった私が、勇気を出して動き始めキャンバスとの“出会い”でまた、次の行動への一歩が生まれたのであった。

一年生（約300名を道ボ11名で）を「最も身近な自然環境（森林公園）への理解を深めると共に人と自然との共生・共存について自然観察会のなかで理解させる」のが、目的であった。

記念館～瑞穂の池往復、男女１５名１グループの班編成、生徒の顔を見ると１６才の年令以上、大人に見えた。自己紹介を兼ね［私のボランティア観］から始めた《形のないもの、常に“ゼロ”からの出発でいいと思い行動する、“ゼロからの出発》　そう話すと私のグループに教師１名が耳を傾けている、心なしか緊張感をおぼえた。形のあるものは何時かは消える、私は形のあるもの求めて今まで過ごしてきたように思い、私の欲望の浅ましさを、形の無いボランティアで過ごしている、知識も能力も見返り等もいらない体だけあれば出来るのがボランティアなんだ、だから楽しく一生懸命になれるんだ。　この生徒の中から一人でも私に感動し、埋土種子のように心の片隅にでも残っていれば、何時かは発芽するだろうとの希望もあった。

晩秋の野幌森林公園、今年は派手な色彩は少ないが雑木林は美しい、アオダモ（モクセイ科）の木に翼果がびっしり、帯青灰色の樹皮を見ながらプロ野球のバットには、材質が強靭であり、打球面が容易に剥離しない特徴をもつ、アモダモ材が多く使われ、その大部分が北海道で生産される事を説明すると「おれ野球部に入ってんだ、将来プロ選手に……」とか「私の田舎にこの木あるよ」観察しながら気づいたことを話し合うことで、内容を深め、分っていってくれた事に嬉しさを感じた。サルナシ（マタタビ科）の木、上の方に鈴なりの果実を見て「食べてみたい」…教師も真剣に探し始める、やっと見つけ分け与え頬ばる、これも自然を発見し理解することなのだ。このおいしい仲間がキウイ・フルーツで中国原産のサルナシをニュージランドで改良されたのが日本の雲州みかん所が産地であると付け加えると、驚いた様子だった。「雲州どこか」と、男生徒に名指しで問いかけたら場所を知っていた、ほめてやったら嬉しそうな顔でガッツポーズをしていた。歩きながら私の方から質問するように心がけて説明していく、逆に質問され解答できず、植物に聞いてみると逃げた場面もあった。

前の方で一段と声が大きい“マムシだ、この森にマムシが棲みカエル・エゾサンショウオ・ネズミ類・鳥類・虫類を餌にしていることからも豊かな森であることを分かってもらった。

観察会で生徒と楽しくいい思いをさせてもらった、そして感謝の気持ちが心地好く余韻にある時、３名の女生徒から感想文が届いた。

～私が心配なのは、このことにより（外来種をさす）森林公園の生態系がくずれてしまうのではないかと言うことだ。今まで、生きてきた、北海道の動植物の世界を人間が、勝手にぐちゃぐちゃにしているような気がしてならない、実際に、大いにくずしていると思うが～　A子1500字より一部抜粋　どの生徒も自分の考えを素直に表現し説得力のある感想文であった。私も直筆で感想文に答えるような形で返事を送った。

～お手紙ありがとうございました。まさか返事がくるとは思わなかったので、とても嬉しいです。今回の森林公園では、色々なことを学ぶことが出来自分にプラスになると思います。３年間頑張りたいと思います。～B子より

ありのまま見、見ようと思って見せ、良く説明を聞いてくれた生徒。自然のなかにいる喜びを感じ、自然と共に私たちはあることに、生徒と共感できた、自然ってありがたいなあ、私の財産をまたひとつ増やしてくれた。

野幌の周辺に、心意気を感じて集まってくる確かなた人達に努力したいものだ。

『宮城の沢の自然』

札幌市西区　　武　田　洋　子

私が初めて宮城の沢に足を踏み入れたのは、１５年程前になります。西区平和にある平和霊園の奥に通称「平和湖」があります。平和湖は昭和３０年に完成した砂防ダム「平和ダム」の上流に生じた小さな人造湖ですが、この平和湖の上流の川原で幼い子供たちと空き缶を使ってカジカを捕って遊んだものです。そのころ、川原は石ころだらけで広々とし、水深も浅く子供連れの水遊びには最適の場所でした。現在、川原にはハンノキ類やカンバ類が丈高く繁茂し、当時のおもかげはありません。

平和湖の上流５００メートル付近に発寒川本流と宮城の沢川の合流点があります。発寒川は手稲山の南斜面にその源を発していますが、宮城の沢川は百松沢山の谷が流れの始まりで、阿部山の麓で発寒川本流と合流しています。

宮城の沢川にそって車が入れるほどの林道がかなり奥のほうまでのびていますが、明治末から昭和１２年ころまで札幌鉱山が金・銀・銅の採掘を行っていたとのことで広い林道はその当時のなごりでしょうか。最盛期には５００人くらいの鉱員がいたそうで、川岸の茂みの中に石積みを現在も見ることができます。宮城の沢川とこの林道の続いている一帯を宮城の沢と呼んでいます。ここ数年、このあたりの自然に触れる機会に恵まれましたので、その折りに見たものを簡単にまとめてみました。なにぶんにも自然のものですので、年ごとに微妙な時間差があることをご了解ください。

【5　　月】

《植物》エゾノリュウキンカ・キバナノアマナ・キクザキイチゲ・ギョウジャニンニク・サンカヨウ・ナンブソウ・ニリンソウ・ヒトリシズカ・ヒメイチゲ・マイヅルソウ・ミヤマエンレイソウ・エンレイソウ・シラネアオイ・エゾエンゴサク・スミレサイシン・レンプクソウ・オオバコ・ヘラオオバコ

《樹木》アカイタヤ・オヒョウニレ・シナノキ・オガラバナ・キタコブシ・サルナシサワシバ・サワフタギ・マタタビ・ミヤママタタビ・フッキソウ・エゾヤマザクラ・ハウチワカエデ・ハルニレ・イタヤカエデ・ツタウルシ・ミズナラ・エゾマツ・カラマツ・トドマツ・ストローブマツ・イヌコリヤナギ・エゾノバッコヤナギ・オノエヤナギ・タチヤナギ・ドロノキ・オニグルミ・ケヤマハンノキ・シラカンバ・ツノハシバミ・ハイイヌガヤ・ヤマグワ

【6　月】

《植物》オオダイコンソウ・カラフトダイコンソウ・クサノオウ・コキンバイ・コケイラン・ハイキンポウゲ・ヒメヘビイチゴ・ヤマニガナ・ウド・エゾノシロバナシモツケ・エゾノレイジンソウ・オオアマドコロ・オオカサモチ・オオバギボウシ・オオハナウド・オククルマムグラ・オドリコソウ・カラマツソウ・クルマバソウ・コンロンソウ・ズダヤクシュ・タニギキョウ・ツボスミレ・フタリシズカ・ホウチャクソウ・マイヅルソウ・マツヨイセンノウ・ヤブニンジン・ヤマブキショウマ・ユキザサ・ルイヨウショウマ・エゾノクロクモソウ・カキドウシ・サイハイラン・ノビネチドリ・ベニバナイチヤクソウ・エゾノタチツボスミレ・オオタチツボスミレ・アオチドリ・アキタブキ・アマチャヅル・クルマバツクバネソウ・オオバタケシマラン・シオデ・ツクバネソウ・マムシグサ・ルイヨウボタン

《樹木》アオダモ・アズキナシ・イワガラミ・ウリノキ・エゾニワトコ・オオカメノキ・シウリザクラ・チョウセンゴミシ・ツリバナ・ホウノキ・マユミ・ミズキ・タニウツギ・ヤマブドウ・カツラ・ヤチダモ

【7　月】

《植物》アレチマツヨイグサ・エゾノカワラマツバ・エゾノミツモトソウ・カタバミ・キツネノボタン・キツリフネ・キレハイヌガラシ・タンポポモドキ・ハタザオガラシ・ハナニガナ・イケマ・ウマノミツバ・オオウバユリ・オオヤマフスマ・オニシモツケ・シロツメクサ・シロバナニガナ・トリアシショウマ・ノコギリソウ・フランスギク・マツヨイセンノウ・アカツメクサ・ガガイモ・ウツボグサ・エゾアジサイ・エゾタツナミソウ・オニルリソウ・クガイソウ・クサフジ・ヒメジョオン・アカネムグラ・アキカラマツ・クモキリソウ・ハエドクソウ

《樹木》ツルアジサイ・ノリウツギ・ハシドイ・タラノキ・エゾアジサイ・ハリギリ

【8　月】

《植物》オトギリソウ・クサレダマ・トモエソウ・ウシタキソウ・エゾニュウ・オオバセンキュウ・オカトラノオ・ゲンノショウコ・サラシナショウマ・ドクゼリ・ヤブジラミ・ミヤマニガウリ・アカバナ・エゾヤマハギ・クズ・ジャコウソウ・ヤブハギ・ツリガネニンジン・ミソガワソウ・オオチドメ・アカソ・エゾノギシギシ・ヒメスイバ

【9　　月】

《植物》アキノキリンソウ・エゾタチカタバミ・オオアワダチソウ・オオハンゴンソウ・キツネノボタン・キンミズヒキ・コウゾリナ・セイタカアワダチソウ・ハンゴンソウ・エゾゴマナ・オオイタドリ・エゾシロネ・コシロネ・シロネ・ヒメシロネ・ダイモンジソウ・ノブキ・フキユキノシタ・ヨブスマソウ・ミヤマトウバナ・ミヤマニガウリ・ミミコウモリ・アキノウナギツカミ・イヌゴマ・イヌタデ・カワミドリ・タニソバ・ツリフネソウ・チシマアザミ・ハナタデ・ヒヨドリバナ・ミズヒキ・ミゾソバ・ヨツバヒヨドリ・エゾトリカブト・エゾノコンギク・ユウゼンギク・アオミズ・ツルニンジン・ヤマトキホコリ・エゾイラクサ・オオヨモギ・ムカゴイラクサ

【シダ類・その他】

スギナ・トクサ・ジュウモンジシダ・リョウメンシダ・ミヤマベニシダ・オシダ・イヌガンソク・クサソテツ・オオメシダ・クジャクシダ・イワガネゼンマイ・ワラビ・コタニワタリ・オシャクジデンダ・ススキ・コメガヤ・コヌカグサ・カモガヤ・ヌカボシソウ・アブラガヤ・ヒメシラスゲ・ガマ

【野　　鳥】

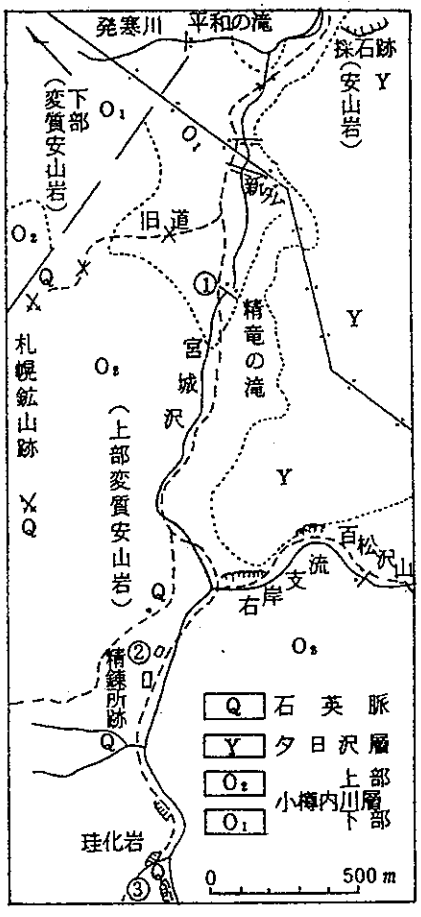
アオジ・ウグイス・オオルリ・カワガラス・キセキレイ・キビタキ・コゲラ・コルリ・シジュウカラ・シマエナガ・センダイムシクイ・ハシブトガラ・ヒヨドリ・ミヤマカケス・ヤブサメ・ヤマガラ

上記のようなものを宮城の沢で観察してきました。【シダ類・その他】と【野鳥】に関してはまったくの初心者ですので、ほんの一部分です。【植物】【樹木】も時期を変えて足繁く通うことで、まだまだ新しい発見があることと思っています。雪解けの早春から紅葉そして初雪が舞うころまで、私にとって魅力あるフィールドのひとつです。皆さんも是非、宮城の沢を歩いてみませんか。

《宮城の沢の地形・地質》

昨年10月26日（日）宮城の沢で観察会を行いました。ここを会場とする観察会は本会では初めての試みでした。初冬の一日、筆者の武田さんをはじめ会員と多くの参加者によって、有意義な観察会となりました。ここで、宮城の沢の地形・地質について簡単にふれておきます。

宮城沢附近



宮城の沢は、百松沢山（1038m）北側斜面に源を発します。市営バス「平和の滝入り口」バス停から採石場跡と平和霊園との間を通り抜け、平和湖（平和ダム）の貯水池を右に見ながら宮城の沢に入ります。

宮城の沢下流の橋を渡ってから、左岸林道を約800m行くと、精竜の滝への降り口があります。

精竜の滝の高さは約７ｍで、小樽内川層の硬い暗青色変質安山岩の壁を流れ落ちています。滝の下の岩場には、緑～赤色を帯びた自破砕溶岩状の部分も見られます。滝の規模、岩質などの多くの点で精竜の滝と平和の滝とはよく似ています。

精竜の滝の上流、約1.5kmの宮城の沢中流左岸に旧札幌鉱山の精練所跡がありますが、今では崩れかかった階段状の石垣が残っているだけです。

札幌鉱山は明治の末期から金・銀鉱山として探鉱・採鉱が行われていましたが、昭和11～12年ころ操業を中止しました。戦後26～27年ころ再開されましたが、下部で細脈となり間もなく閉山しました。この鉱床は、含金・銀石英脈で、ほかに脈石として少量の方解石・重晶石をともなう場合もあります。また、石英脈中には、まれに水晶の小結晶も見られます。宮城の沢上流部分には、美しい青緑色の変質安山岩の岩場がナメ状に連なり、秋の紅葉がみごとです。

反魂草(ハンゴンソウ)

札幌市　　川端　功治

一昔前は近郊や線路縁、路傍や野原の何処かで必ずと云って良い程見かけた野草のハンゴンソウ。今では意識して探さ無ければ、見ることが難しくなつてしまつた。だからと云って、残念がられたり、絶滅危惧種にしようとか、保存運動を展開する等の話題にもなら無い、地味で目立たない存在の野草である。

背丈が高く、人の背丈を越えるのもあるキク科の植物であるが、丈の割りには小型の黄色い菊状の花を散房状につける。現物を示すと「これならわが家の裏の排水溝縁に2－3株位ある」と返事が返ってくることが多い。かっては山菜として、又は救荒食物として利用されたが、あく抜きしなければキド味が強烈で食べられない。「ナナツバの若芽」と言えば、懐かしがる年配の方もあるかと思われる。

ところが生え抜きのハンゴンソウを尻目に、外来のオオハンゴンソウ（北米）、アラゲハンゴンソウ（キヌガサギク）米　、ハナガサギク（ヤエザキハンゴンソウ）米、が猛烈にはびこりだし、ついには線路縁や、道路縁は外来種で埋め尽くされてしまつた感がある。おまけにあちらからの渡り者は、花が大型で、鮮やかな　橙黄色だから、大群落は誠に見応えがあって、車窓から眺められる風物誌の一つになった。

ところが一頃の勢いに翳りが見え始めた。在来種との関係を懸念する声も薄らぎ始めたのはセイタカアワダチソウと同じ様に在来種を排除する根の分泌物が、自分の行動も制約するようになる、所謂自家中毒のせいだと、云われている。

ところで標題の反魂草と云う漢字の語源が、なんとなく曰くありげで気になる。古い話に飛んで恐縮ですが、若かりし頃山形県出身の若者と仲良しになり、下宿も一緒でよく呑んで騒いだ懐かしい思い出があり、誰しも経験のあるところである。その友達は酒に酔うと、「山形おばこ」と云う郷土の民謡をよく歌った。

彼にしてみれば故郷恋しさに、心で泣きながら歌っていたのか、素朴で哀愁に満ち溢れ、私の胸にしみ透おつた。何度も私のアンコールに応えて歌つてくれた。

ところが私も酔ってくると、歌詞の一部にしつこく質問を繰り返した。５０年も昔のことだから、うろ覚えだが次のような歌詞であつたと記憶している。

おばこ　来たかと　田圃のはんずれまで
出てみたば　　おばこ　来もせで
タンパコ売りなど　　ふれてくる

どうも秋田おばこ節の替え文句のような気もするけれど、そんなことは二の次であって、私は「たばこ」をなぜ「タンパコ」と発音するのかと質問を繰り返した。彼は　頑固に（婆さまの直伝であるから、誰がなんと云おうと絶対に変えられない）と云いはった。

煙草は嗜好品であるが、習慣性と健康阻害の懸念に名を借りて課税の対称にされ易く庶民はこの高価な課税品に、どのように対応したのかを知りたかった。
「タンパコ」は外来の「タバコ」では無く、何処かそのへんにある野草で作られた代替え品のような気がしてならなかつた。戦時中オオイタドリの葉を乾燥して代用品にしたことが記憶にあるからである。

ある時ひよっとしたことで、中国では「たばこ」のことを「タンパコ」と呼んだ地方があると知って驚いた。　中村　浩　博士の「植物名の由来」によると、
「中国では、タバコつまり煙草（えんそう）という名のほかに、反魂草をはじめ淡婆姑ー淡芭弧ータンパコー中略ー、等の多くの呼び名がある。タバコは、わが国には、桃山時代ー１５８０年代に輸入されたが、はじめ大名、貴族、豪商の間にひろまり、次第に庶民階級にまでひろがっていった。ー中略ー。

ハンゴンソウの名は「反魂草」に由来するものといわれる。反魂とは死者の魂をよび返すという意であり、返魂とも書く。」と同博士は述べている。

当時中国ては戦乱のきびしい時代であったが、天下を平定した漢国の武帝は、名君の誉れも高く、万里の長城の延長工事を継続した皇帝でもあった。
その皇帝の最愛の李夫人が、ふとしたことで病気になり、急逝したので、皇帝は嘆き悲しみの余り、執務を放棄してしまった。

困り果てた臣下はよりより協議のすえ、高名な呪術師に対策を協議したところ、条件付きでその師は引き受けることを承諾した。

それは亡くなった夫人を、あの世から呼び戻し皇帝に逢わせるが、三回に限ると厳しく申しわたした。ただちに皇帝にその旨を言上したところ、大いに喜んですぐに施術するよう命令した。

呪術師は呪文を唱え、反魂草でつくられたお香が焚かれた。すると不思議。お香の煙の中から婉然と微笑む李夫人があらわれた。よろこんだ皇帝は歓談の限りをつくした。次の日も。次の日も。あっという間に約束の三日目が過ぎた。

ところが四日目も呪術師を呼びつけ、直ちに施術するよう迫ったので、師は皇帝の身に重大な異変が起きることを告げ、翻意を促したが聞き入れられず、それどころか抜刀して殺意を仄めかし、施術を迫った。

もはやこれまでと決意した師は、皇帝に呪文の唱え方を教え、手持ちの反魂香の全てを差し出し、逃げるようにして退去し、行方知れずとなった。
喜び勇んでお香を焚きまくった皇帝は、あっと云う間に痩せ衰え、臣下が慌ててお香とり上げた時は既に遅く、皇帝はこの世の人で無くなっていた。

痛ましくも悲しい物語てはあるが、我々の身じかにあるハンゴンソウに、このような、超能力があるとは思えない。　そこで凡人の想像は限りなく回転する。
先ず山菜ではナナツバと呼ぶのは、葉の鋸歯が、大きく３－７裂し、裂片は狭長で、垂れ下がるからである。
それとその垂れ下がる様子が、ウラメシヤーと柳の下からヒュー、ドロドロノ鳴り物入りで現れる幽霊の手つきと良く似ているから、農山村の人達は「幽霊草」とも呼ぶ。

この他に「ナナツバ」と呼ばれる草に「麻」がある。これは５－９裂して、手を下げた様に垂れ下がる。漢名は〔大麻」である。

マリファナ、ハシシュの別名で、悪名が高く、所持しているだけでも、取締り法の適用を受け、きつい処罰を受ける。クワ科の外来種で、かつては製麻用として道内各地で栽培が奨励されていたせいか、野性化したものがあり、これを採取して

検挙される例が跡を絶たない。

もうお判りと思うが、ハンゴンソウ、タンパコ、とタイマを置き換え、更に何か秘薬を加えて、呪文を唱え　、精神の高揚を図れば、たとえ幻覚であっても亡くなった人が、出現する場合もあり得ると考えるのは、あながち不自然ではない。

過日ＮＨＫの放映で、中国の古墳発掘で出土した遺体から、多量の水銀化合物が検出した事を報道している。これは不老長寿の秘薬として、当時の高貴な人達は服用したらしく、突如として急逝するのが、その症状の特徴とされている。

漢の国の武帝や李夫人の急逝は、もしかして、これに関係があったのかも知れない。

冒頭で述べた我が親友の歌は、そのへんにあるありふれた野草を、手作りで加工した商品であったと思う。当時でも外来のナス科の「タバコ」は高価であって、それと区別する為に「タンパコ」と呼んだとすると無理がない。

白昼堂どうとふれ売り歩くことからも、頷けることであり、近くの農家の離れ屋からゴトゴトと水車の音がして、ニワトリのトキの声が聞こえてくれば、あたかもそこは自分の故郷であったかのような錯覚に陥り、その道端に一株のハンゴンソウでも生えておれば、誰でも　最高　！　と叫ぶことだろう。

終

注　おばこ（東北地方で少女・娘のこと）

大辞林　小学館

挿絵ー新植物図鑑　村越三千男　大地書院

本の紹介 BOOK

稲本　正 著

森の自然学校

岩波新書　1997.12.22発行

定　価　660円

昨年、親しい友人が、鉄筋コンクリート造りの地下・地上2階の家を新築しました。新築の家を訪れると、外壁は意図的に打ちっぱなしにしてあり、部屋の間取りもモダンな構成になっていました。

帰宅して、改めて木造作りの我が家を見回しながら、木造作りの良い所を色々考えてみたのでした。

木材は、言ってみれば細いパイプの束でできているので弾性もあり強度もあります。パイプは主にセルロースという高分子化合物で構成されており、しなりに強い面があります。そのパイプの束を接着し、木材全体に適当な剛性を与えているのが、リグニンという高分子化合物です。ですから、鉄筋コンクリートの鉄筋部分がセルロースであり、コンクリート部分がリグニンでもあります。このように考えると、木造建築の我が家でも卑屈になる必要がないと変な理屈をつけ納得したのでした。

本書の前書きに「…四角い冷たいコンクリート箱に金属でできた、どこかきどったインテリア用品を配するのが流行の最先端だった。…そうなれば当然、自然そのものや、自然素材は傍流に押しやられる。森や森の恵みである木と接する機会さえほとんどなくなった。…」との文があります。「自然と掛け離れた日々の暮らしから、眼を少し森に向けてみませんか」という著者のよびかけの主張にそって、①木を使う・木で作る　②森で遊ぶ・森で学ぶ　③森をつくる　④森の文化を再生する　の四つの章からこの本は組み立てられています。

「森の文化を再生する」の章で「…人間が森を見るということは、ただその形を見ることではない。その気配を感ずるというか、より上位の概念でとらえるということだ。…」の一節が印象に残ります。

INFORMATION FOR VOLUNTEER RANGER

観察会研修会 情報

1月以降のボランティア・レンジャー協議会主催の自然観察会

◎「野幌の冬の森」自然観察会
平成10年２月２２日（日） 10:00～12:00
下見 ２月１５日（日）
集合場所 北海道開拓記念館前

1月以降のボランティア・レンジャー協議会が協力する自然観察会

◎「１月の森の観察会」
平成10年１月８日（木） 10:00～12:00
集合場所 北海道開拓記念館前

◎「冬の森の観察会」
平成10年３月２２日（日） 9:30～14:00
下見 ３月１５日（日）
集合場所 野幌森林公園 大沢口

お知らせ

北海道庁の機構改革で、担当部・課・係の名称が変わりました。

本庁は、北海道保健環境部環境室自然保護課保全係が、北海道環境生活部環境室自然環境課ふれあい推進係(電話代表(011)231-4111番 内線24-367)に。支庁は経済部林務課自然保護係が、地域政策部環境生活課自然環境係になりました。

［ご案内］　　自　然　観　察　会

「野幌の冬の森」

２月の野幌森林公園の自然は、積雪のなかで微妙に変化してきています。年前と現在の同じ樹木の違いや野鳥の囀り、動物の足跡や食痕など、森の生活を見たり聞いたりする自然観察会に参加してみませんか。

（主　　催）　北海道ボランティア・レンジャー協議会
（協　　力）　北海道野幌森林公園事務所
（日　　時）　平成１０年２月２２日（日）午前１０時から１２時まで
（集合場所）　野幌森林公園内「北海道開拓記念館」前に、午前１０時までに集合してください。
（観察コース）　「北海道開拓記念館」周辺を、午前１０時から１２時まで散策します。
（案　内　者）　ボランティア・レンジャー（自然解説員）、公園事務所職員

（そ　の　他）
○　この自然観察会は、どなたでも自由に参加でき、参加費・事前の申し込みなどは不要ですが、当日集合場所で受付をします。
○　暖かい服装で、ご参加ください。

（下　　見）
平成１０年２月１５日（日）10:00~12:00　北海道開拓記念館前集合
気軽に、ご参加ください。

交通機関のご案内
☆　ＪＲ森林公園駅下車　徒歩約２０分
☆　地下鉄新さっぽろ駅からＪＲバスを利用（北レーンバス乗場）
☞開拓の村行き（１０番乗場）に乗車し、野幌森林公園下車　徒歩約６分
新さっぽろ発　８時３５分→記念館入口着　８時４６分(日曜ダイヤ)
〃　９時１７分→　〃　９時２８分(　〃　)
☞江別・札幌方面行きのバスに乗車、国道１２号「開拓の村入口」下車
徒歩約１６分

問い合わせ先
北海道ボランティア・レンジャー協議会事務局佐々木幸夫　☎875-6602
北海道野幌森林公園事務所公園管理部公園利用課　☎898-0455(内線44)

編集後記

◆平成10年が始まりました。各地において会員の皆様は穏やかな新年を迎えられたことでしょう。本会の活動は地味ではありますが、着実な歩みを進めています。その一端を広報誌を通じて果たしていきたいと考えています。

◆道は本年度、豊かな海と森づくりに１億円を超える予算で北海道にふさわしい豊かな森ときれいな水の再生を計画しています。広葉樹が持つ保水やろ過の機能を重視し広葉樹の造林を行ったり「魚つき林」を整備していく構想です。私たちの観察会の活動は樹木や林床植物の特定や同定も必要ですが、森林の機能や海との関係というマクロのとらえ方をする目を養い、観察会の参加者にこのことを啓発していくことも必要でしょう。

◆事務局のデータによると、私たちの会の観察会とそれに伴う下見研修の合計回数は50回に及ぶと言います。しかし、これらの観察会は札幌とその周辺が中心になっています。観察会を全道に広めていくことは大変難しいことですが、本会の大きな課題でしょう。

北海道ボランティア・レンジャー協議会
会報誌「エゾマツ」43号　1998.1.10 発行
発行責任者　大　友　　健
（表紙絵　広報部　三崎　篤）